三宅晶子教授退職記念講演会　はじめての古典文学

平成三十一年二月二十三日　神奈川近代文学館展示館２階ホール

シンポジウム　これからの古典教育

パネリスト　三宅晶子・鈴木　彰　司会　青山浩之

古典教育との関わり

青山　司会の青山です。よろしくお願いいたします。色々な世代の方が大勢集まってくださり、話は尽きないかと思います。実は打ち合わせはほとんどしていません。三宅先生から全員参加型のシンポジウムをというご要望があるだけです。お二人のご講演のテーマ、「はじめての」「二度目の」というところが、面白かったと思うので、そのあたりを補足していただきながら始め、そして「これからの」ということで、会場の方々にもたくさんご発言をいただきたいと思います。『古典教育デザイン』という雑誌に掲載させていただきますので、ご発言の際には、ご所属とお名前を言っていただけますようお願いいたします。

それではまず三宅先生、ご自身は「はじめての」ということで、私もとてもそういったアイディア、魅力的に聞こえましたが、そのあたりを補足していただくのと、結局、鈴木先生と同じ思いをお持ちなんじゃないかと思って拝聴しましたが、いかがでしょうか。

三宅　ありがとうございます。私が主題を話して、その非常に魅力的な具体例を鈴木先生がお話しくださったという感じで、良かったと思います。

鈴木　打ち合わせは全くいらないなと、と今回改めて感じました。実は私は、三宅先生のことをふだん「お姉さん」と呼んでいます。これは「姐御」という意味ではなくて（笑）、本当にお姉さんとしてかわいがっていただいているからなのです。そういった仲として付き合っていると、大体見えてくるものがあるのですね。ということで、「こんなものかな」と考えて準備してみたら、今日みたいなことになりました。それがみなさんにどういう風に伝わっているのか、いろいろ感想など伺えれば、私としてはとても嬉しいと思っております。

青山　皆さんにもそれは伝わっていらっしゃると思います。高木まさき先生がはじめのご挨拶で「三宅先生は教育に対して最初の思いと今の思いは違うんじゃないか」と言ってくださいましたが、私もそれを感じています。そこで、あらためて「教育への思い」や「先生が教育というものが大事だと思い始めたきっかけ」、そして「これからどうしていくべきなのか」という点を、もう少し補足していただけますか。

三宅　赴任当初から教育には大変興味がありましたが、文学研究者だからという意識の方が強かったのだと思います。「私のような教育の素人に何か言えるわけがない」と思っていて、小中高の教員の方達や、教科教育のご専門の先生方を怖がっていました。教育学部での経験を積んで、だんだん恐怖心が薄れていった、それは実態を把握するようになったということや、自分の見識もそれほど的外れではないだろうという見通しを持てるようになってからです。でもまだ怖いです。今日なんてすごく怖かったのです。

青山　なるほど、怖かったのですか。誰もそう思ってなかったですよ。

（会場笑い）

鈴木先生も、教材としてどう使っていくかというところで興味深いお話でした。鈴木先生にとって古典教育、教育現場における古典の学習とはどういうものかという点をお話いただけますか。

鈴木　私は中学や高校で非常勤講師は経験していますが、それくらいしか現場の体験がありませんので、実際のところ今現在どういう問題が現場で起こっていて、先生方の間でどういう風に連絡を取り合っているのかわからないところもあります。けれども、普段研究しているときには、テキストからその裾野をどのように広げていき、文学と向き合っていることでどこまで人間の世の中のことがわかるのだろう、という考え方をしたいと思っています。たとえば、国語という枠組みにのみ当てはめてしまうと、今日のような話はできないと思うのです。『平家物語』は戦争の文学だから」ということで、「これをもとにして戦争について考えましょう」と、国語の授業でやったら、大変なことになってしまうのではないかと思います。しかし、何かを学ぶための教材としてそれを考えていくということであれば、本当はどこまででも展開させて行けるはずのものだ、という理解を私は基本にしたいと思っています。中学や高校で時々講演をさせていただくときには、あえて教科の枠を取り払ったようなものをつないで話をしています。できるだけひとつの型にはめ込まないような発想ができるように、自由に、と口では言いますけれども、結局ははめ込んでしまいがちです。それをどういう風に自分の力で乗り越えていけるか、という楽しさをできるだけ伝えたいと思っています。中学・高校の現場で今の私自身は教えられないので、なるべく自分の文学研究の中で実践するしかないなと思って取り組んでいる最中です。

青山　なるほど、ありがとうございます。そういうお二人のお考えについて、先ほどの講演もお聞きになって皆さんそれぞれが色々な思いをお持ちになったと思います。また「ここをちょっと聞いてみたいな」ということもあったと思います。それを全員参加型といってもお一人ずつお聞きしていくと夜の八時くらいになってしまいます（笑い）。「話したい人がいっぱいいて、収拾がつかなくなるんじゃないですか」と、総合司会の池上寛子さんもおっしゃっていましたので、上手く交通整理ができるかわかりませんが、まずは挙

手制で、先生方に言ってみたい・聞いてみたいことがあれば、お願いしたいと思います。もう挙がりましたね。それではお願いします。

一気読みのスヽメ

渡邊　こんにちは。三宅研究室に所属しておりました渡邊千穂と申します。今教員をしておりまして、六年間くらい海外にいた後、地元福岡で教員をしております。とても今日面白く、生徒もただ読むよりも引き付けられるという授業で、眼から鱗が堕ちる体験をというお話でした。アクティブラーニングを中心に考えられていたと思うのですが、それは「古典の教材で」考えさせるということだと思います。けれども実態としては、現時点で「読ませるだけのもの」で読む力をつけるために、アップアップという状態でもあります。面白くかつ古典教材を古典教育で考えさせるとなると、読む力というものが弱くなってしまうのではないかと不安を感じました。三宅先生のご講演中一番最初にあった「文法中心」「現代語訳の押しつけ」「面白くない」から、アクティブラーニングの方にシフトしていくと、読む力というものが弱くなるなというところで、どこまで読む力をつけて、どこまで考えさせるということが理想だと思われるか、ということをお伺いしたいと思います。

三宅　とても大切なことを質問してくださり、ありがとうございます。いつもこういった具体的な話をすると、必ず現場の方達は、今いただいたような不安と申しましょうか、疑問をお持ちになるようです。ですが、私は大雑把に一気読みの方が、第一段階的な「読む力」は身につくと思っています。ですから、現場の先生たちはちょっと誤解していると思うのです。

まずは大掴みに内容把握するのでないと、誰にだって読みこなせないでしょう。というような基本的な問題もあるのですが、受験技術と私が先ほど申し上げたことと、生涯に亘って身に付けたい古典力と申しますか、人間力というようなことは、どのような目的、興味、レベルかによって違うと思うのです。だからそれぞれで上手に組み合わせるしかない。最も優秀な人は一人でも両方できるでしょう。でも現実はそうではない場合が大半ですから、「この子だったらこのくらい」みたいに、実態に合わせて臨機応変に変化させる。それこそが先生方の腕の見せどころだと思います。全然受験で古典の点数なんて取らなくても良い人たちなのだったら、良いのではないですか、楽しくやれば。ものすごく頭の良い優秀な人だったら受験勉強は放っておいても自分で対処しますよね。この二パターンは明快なことなので、正直あまり気にしなくて良いと思っています。たくさん居る中くらいの人たちをどうするかの問題だと思います。

青山　鈴木先生はいかがですか。

鈴木　私も全く同感です。大掴みにするっていうのは、行きつく先というか、流れていく方向を予め知っておくということだと思います。なんとなくぼーっと過ごしていると、世の中のことは「1・2・3・4」と進んでいくようですけれど、実は私たちは、「1・2」を聞いたらもう「3・4」を頭の中で先取りしているのです。「いろはに」と私が言ったら、みなさんの頭の中には「ほへと」が浮かんでいますよね。このように、全体を大掴みにしていると「こっちに進んで行く」ということがわかっているので、そういう流れをある意味先取りしながら、文脈を読みながら、生きていくことになります。古典の場合も、知らない単語がでてきたとき、それだけ見ていた

ら意味がわからないけれど、話の流れをおさえておけば、この脈絡だったらこういう意味にしかならない、と絞り込んでいけます。大掴みにしておくことの利点は多分そういうところではないでしょうか。私は英語はそんなにできないのですが、読めない英語を読むための方法は国語で養ったという実感があります。間にわからない単語があったとしても、文脈で埋めて読むということです。まさにこれと同じ事ではないかと思います。

三宅　ずいぶん丁寧に説明してくださってありがとうございます。

青山　ありがとうございます。今日は古典教育の実践者ということで、実際に中学校や高校で教えている方が大勢いらっしゃいますし、これからは小学校でも古典を扱っていくわけであります。そうした中で日頃感じていることなどをもっとお聞きしたいのですが、どなたかいらっしゃいますか。

どちらが早かったですかね。では、そちらからお願いします。

現場の教師事情

笠原　二〇〇一年に大学院に行きまして、今は横浜翠嵐高校におります笠原美保子と申します。三宅先生の最初のお話で、受験勉強とそれから大掴みで読む読み方との違いみたいなことをおっしゃっていましたが、実際に高校で受験勉強の指導をしていると、受験問題というのは大体初見の問題がパッと出てそれを大掴みにどういう話か掴んで想像してっていう力がないと解けないので、一時間に三行という授業は定期テストを取る力しかつかないです。今はすごい受験校にいますが、ここのレベルでは、基本的には授業でも一個を大掴みにとって想像したりする授業の方が喜ばれているような気がします。

私は別の視点で、高校の授業が変わらないことについて考えています。学校の先生って忙しいので、自分が受けてきた授業と同じようなことをするのが一番楽なので、それで変わっていないのではないかなという風に思います。例えば、今は受験校にいますが、前の前の学校は一人もセンター試験を受けないし、たまに推薦で大学に行く人がいるくらいで、多分生徒の一人も古文を受験に使わない高校にいたんですけれども、そこの先生もだいたい同じような品詞分解をさせるような、あるいは動詞の活用から始めるような授業をしていて、「これは本当に何にも役には立たないよな」と思って、私は文法を全く使わないで現代語訳を使った授業や発表とかをさせていました。だから高校の授業がつまらないのは、文法を使う授業の方が楽だからだと思います。先ほどの鈴木先生のような面白いことを生徒に言ってあげるためには、教育者自身が研究をしていないとわからない。ですが文法は、文法の本が頭に一冊入っていると一時間ずっとそれでやっていけるので、結局楽だからじゃないかという風にずっと思ってます。三宅先生も鈴木先生も高校など現場にいらしたこともおありだと思うので、その点についてはどう思われるかなというのをお聞きしたいと思います。

青山　お願いします。

三宅　私もちょっとだけ都内の私学女子校で非常勤をやっていたことがあります。その時はまだ大学院生だったので、やはり指導書を見てやっていました。（会場笑い）

始めてまもないある日突然、中学部の古典文法を何週間かだけ、教室が破壊されているようなクラスで「やってきて」と言われたのです。品詞分解の授業をやったのですが、ほとんどの人が何も聞いていませんでした。でも、試験するとできる子もいるんです。だか

ら、やってもしょうがないなって思いました。

（会場笑い）

鈴木　このあとに何を話したら良いのか、よくわからないのですが（笑）、研究ってあまり大袈裟に考える必要はないですね。今、「研究していないとああいうことはできない」っておっしゃいましたけれども、おそらくそんなことはなくて、日常生活の感覚をきちんと持ってテキストと向き合ってさえいれば、先ほどお話しした「二回目以降の読み」では、いろいろなことを発見できると思います。おそらくその方の体験の中から気が付くことがたくさんあると思うのです。そのいろいろな体験がいわば「問い」になって、生徒たちの間接的な体験になっていくと思います。だから、そこはあまり研究云々と大袈裟に考えなくても良いのではないかという気はしています。

三宅　先生の方が、頭が固いから「全部知っていないと何もできないし」って思ってしまう。子どもさんたちとか生徒さんたちはすごく自由に発想できますよね。先生はそれをつぶさないように拾い上げることが大事だと思います。だから、生徒に任せておけば良いのです。

笠原さんはそのような授業の実践者ですから、ご自分は百も承知していつつ、私たちに話させるために、質問してくださったのだろうと思いますが、私はそう思っています。さっきの私の「眼から鱗」だって授業の中で学生たちとのやり取りの中から、勝手に思いついたことです。生徒も先生も、気楽な気持ちで取り組んで欲しいですね。大事なことはそこから広げていけるように仕向けていくことで、必ずしも自分で広げる必要はないのでは。先生は受け入れてあげれば良いと思います。

青山　今、子ども・生徒たちに任せるというお話があったと思います。先生をずっとやっていて色々な学校に行くと、それぞれの学校のお子さんたちの特徴がわかるわけですが、中には文法が面白いと思うような子もきっといると思います。例えば、「これがわかると読めるんだ」というように、マニュアル的に理解することが好きな子もいるはずで、そういう子たちをざっくりと文脈で読んで楽しませようといっても、少し違った問題が出てくるのかもしれないですね。その場合は「その子に応じて」となるのだろうなと、今、お聞きしていて思いました。

このお二人は、人に応じて柔軟にという派ですから、「文法がダメだ」と言っているわけではないと思います。でも、これまでずっとやってこられた結果、今、古典が面白くないというお子さんが多いとなれば、今後どうしていくかという課題の中で、文法の教え方の問題は大きいと思います。

はい、お待たせしました。先ほどのもうお一方、お願いします。

那須　今日はありがとうございました。愛知県の海陽中等教育学校に所属しております、那須充英と申します。「せっかく遠くから来たのに、あなた何も言わなかったのね」と言われるのが怖いので、早く言おうかなと思ったのです（笑い）。私も伺いたいと思っていたことがほぼ丸被りしていましたので、ドキドキしながらマイクを受け取りました。やはり現場の教員には、特に楽なんですね、文法を教える方が。その中で、新しいことをやる、まあ、最初に通して読むということをやってしまうと、中身がわかるから、生徒が話を聞かなくなるんじゃないかと不安に思っている先生方が多いんだと思うんです。

隠して隠して、最後まで分からないようにして、ということをしないと、生徒たちが「だ

ってもう話がわかるからいいよ」となってしまうと思い込んでいる先生が多い気がします。我々教員の意識をどういう風に変えていけばいいかということなのではないでしょうか。この場にいる先生方はおそらく、「こういうことをヒントにして、こういうことをやっていこう」と意欲的に思われる方たちだとは思いますが、我々が学校に帰ったときに戦うべきは、同僚の先輩達なんです。そういった頭の固い先輩達にどういう風に話を広げていけばいいのか、というようなところを、少しお話をいただければと思います。

青山　そうですね。先ほど、本当、0コンマ1秒ぐらい遅かったのですよね（笑い）。でもさらに話題を進めるご質問をいただいて、ありがたいです。こういうことは三宅先生がスパッと切った方がいいと思うのですが。

三宅　アメとムチだと思います。

（一同笑い）

え、だって私、前はそれこそ、ムチばかりだったと思うんです。最近アメが大事ってことがわかってきました。とりあえず褒めることが大切ですよね。相手を良い気持ちにさせてあげて、私に心を開いて向き合ってもらうために。遅まきながら、そのことに気付きました。褒めるということは、その人の良さを見つけるということで、自分がその人に心を開いていることを、その人に伝えるということを意味していて、それを伝えることが大切なのだと悟ることができました。その関係性の中で上手に批判を入れていく。わたし的にはこちらの方がもっと大事だと思っているので、ムチを使うためのアメですけれどね。

青山　鈴木先生、補足をお願いします。

鈴木　ダジャレで言うと、教鞭（ムチ／強弁）をとっているだけじゃだめだということですね。

（一同　「おおー」と納得）

「おおー」と言われても困るんですが（笑）。私からすると、出し惜しみは全くする必要が無くて、生徒に「内容はもう知っているよ」と言われたら、その時に、「じゃああなたその先に何を知りたいの」って聞いてみればいいだけの話ですから。

三宅　先生たちとどう戦っていくかということも聞きたいみたいですよ。

鈴木　先生との戦い方は簡単ですよ。「私のところの生徒は、同じ時間であの話も読みましたし、この話も読んでいますよ」と言って、生徒にどんどん新しい物語を示してあげればいいのじゃないでしょうか。そして複数の話を結びつけて読む。「もともとこの部分だけ読むはずだった物語を、こんなに深く私たちは読んでいますよ」と言えばいいと私は思いますけど。もちろんそれだけ努力というか、教員の準備が大変だとは思いますけれど、でもそういうことを楽しむのが、ある意味教員の面白さだと私は思っています。こういう風に圧倒してしまえばいいのではないでしょうか。そんな気がしますけど。

青山　いかがでしょうか、今のアドバイスで。

那須　頑張ります。

メディアの転位

青山　これまでのお話のように「実践」や「授業」ということに関しては、中村さんが話してくださるだろうということで…。お願いできますか。

中村　ご指名いただきありがとうございます。東京学芸大学の国語教育分野の中村純子と申します。三宅先生には、川崎市の中学校教員時代に内地留学で、二〇〇一年から二年間、お世話になりました。ゼミでは、本当に楽しく、『源氏物語』を読ませていただきました。十二単を着る会や、三渓園での勉強会な

どのイベントを開催させていただきました。

私の専門はメディア・リテラシーです。教材として扱うメディアは活字だけではなく、映像も含みます。ビジュアル・リテラシーです。三宅先生が「文字情報だけに頼らない」とご提言され、テキストを広くとらえておられることに大いに共感いたしました。

古典文学の魅力の根本は、時代を超えて通じる人間ドラマにあると思います。人は恋をしたり悩んだり争ったり、いろいろな葛藤を乗り越え、生きていくものです。そういった人々の営みを物語として読むことでたくさんのことを学んでいきます。また、自分自身の人生を物語化していくことで、自分なりの答えや生き方を見つけていくものだと思います。だからこそ、人は古典を読み継いでいきますし、古典文学の魅力はそこにあると思います。

そして、この古典の魅力を伝えるために、これからの時代の古典教育の教材は「メディアの転位」を考えるべきだと思います。

古典はもともと口承文学として、音声メディアで伝えられてきました。それが、文字文化の流入によって、筆で記録され、文字メディアに転位しました。さらに、筆による手書きメディアから、活字メディアに転位しました。私たちは現在、教科書などの活字メディアで古典に出会います。ここで、さらにもう一つメディアを転位させ、映像メディアによる古典と出会いも考えるとよいでしょう。

「見る」ことによる古典との出会いです。

三宅先生のお話しの中で、能のワンシーンを映像で比較するというご提案がありました。能楽師の演技の違いの分析は今の高校生には難しいかもしれません。しかし、高校生が自分で演じてから能楽師の演技を考えさせる授業はどうでしょう。三島由紀夫の『近代能楽集』は能を現代劇に書き直したものです。その中から一つ選び、現代ドラマに書き換え、演じるのです。スピンオフのスピンオフといった授業です。生徒自身を表現者に設定するのです。脚本を書き、演技をタブレット端末で動画撮影してドラマ化するのです。もしくは、フリーズフレームとして、ワンシーンを写真撮影するのもよいでしょう。そして、その演出の意図を述べさせるのです。この活動の後に、原典となる能と比較するのです。そのシーンはどう書かれていたのか、能楽師はそのシーンをどう演じていたのかと、探究させていくのです。文法を理解して古文が読めるようになることを目標とする活字メディア中心の授業からの脱却です。

私は、昨年度の中等国語科教育法で学生に作らせる模擬授業の一つに、『源氏物語』「若菜」の巻を取り上げました。女三宮をめぐる源氏と柏木のドラマを大学生たちの恋愛観に引き寄せて考えさせました。この模擬授業では八〇分という短い時間の制約がありましたので、『源氏物語』のあらすじを捉えなおすために、漫画を活用しました。ポイントとなる部分は原文のテキストも用意しました。物語の概略を掴み、学生たちは自分たちなりの恋愛論を交えて話し合い、たいへん盛り上がりました。

このように、古典の授業ではドラマ、映像、漫画といったメディアを活用し、表現活動を通して考えを深めることを目標に設定できます。そして、その目標を達成するために必然的に古文を読まざるを得ないという状況をデザインするのです。そうした活動の中で、本文を読み返し、「けり」と「ける」の表現の違いは何なのかと古典文法の理解の必要性にも気づかせていければと思います。

古典の魅力を伝えるメディアを広くとらえることと、古典の授業を「逆向き設計」の

発想で作っていくことが重要と思い、発言させていただきました。

あ、質問としては……　（質問を忘れる）

（一同　笑い）

「文字情報だけに頼らない」と提言された三宅先生はどんな授業のイメージをお持ちだったのか、ぜひお聞かせください。

青山　ではちょっとつないでおきます。やはり、古典の内容に興味が持てたら実際に読んでみたくなる。僕も思うのですけれど、文法だけではなく、自分も高校生の時に古語辞典をいっぱいひいて、古語を暗記するイメージが強かった。英単語と同じように。単語を知っていれば読めるという教育でした。だから、興味が先で、もっと深く読みたくなったら古語を調べようという「逆向き」のような考え方が今は大切だと思います。最初にどういうふうに古典に興味を持つかというところで、映像とか、すごく効果があるような気がします。

三宅　そういうのももちろんですが、私自身が念頭に置いているのは、内容の理解をするときに、たとえば『百人一首』の光琳かるたの絵で読み取っているものが、これは光琳の（あれは光琳とは断言できないと美術史専門の人は言いますが、一応私は光琳で行きます）、光琳が何を読みとっているかという風に見ていくと、その『百人一首』の和歌の世界がまた全然違うものが見えてくるわけです。だから別に、何と固定的に言っているわけではなくて、あらゆるものが使えるでしょうと。文字だけじゃないでしょうということです。ですから、中村さんがやっていらっしゃることももちろんそうだなと思いますし、他にもいろいろなものがありますし、さっき紹介した一覧表のなかで、いろんな提案を学生さんたちがしてくれているので、ぜひ皆さんもあれは読んでいただけると嬉しいなと思っています。

鈴木　同じです。

三宅　あの、平家琵琶もすごいですよ。聴くだけでイメージがブワーっと拡がります。良い演奏を聴かないとダメですけれどね。之が大切です。

青山　そうですね。テキストだけじゃないメディアというのは、今日お二人とも共通していましたね。何かを見て考え、「やっぱりそうなのか」とテキストと結びついていく。

　他にもどうですか。今の点で話題を展開できたらと思いますので、ぜひ質問をしていただければと思います。

教科書と教材

柴田　秋田県から参りました。秋田北陽高校で教鞭を取っております、柴田創一郎です。九六年に三宅ゼミを卒業しました。久しぶりに横浜に参りました。今日はありがとうございました。高校で今、自分が相手にしている生徒たちは、農業科がありまして、そのクラスの生徒は受験を一人も受けず、高校入学時に古語辞典も文法書も購入しません。必履修科目の国語総合というのがございまして、進学校では、現代文と古典に時間割自体を割り振るのですが、うちの科ではそれ自体しませんので、現代文の単元の後に古典を持ってくることも可能で、例えば、現代俳句の時間、二つの俳句を比べて、共通点と相違点を見出だそうとやった次の単元で、漢詩を扱って、二つの漢詩の共通点、相違点を見出してみようと。その単元配列次第では、古典教育のハードルを下げることも可能で、この辺は進学校でない方がやりやすいなと感じることも多々あったという風に経験しております。先生方に質問なのですが、やはり教壇に立つ以上、教科書の制約は大きいものがございまして、もし、先生方が中学校三年とか、そして

高校一年とか、古典の教科書、国語の教科書をつくられるとしましたら、教材の選定ですとか、配列ですとか、どのようなものを理想とされているのかをお聞かせください。お願いします。

青山　お願いします。

三宅　最近は教科書をかなりチェックしていましてね。大学院の授業でやっているので、私がというより、学生さんたちがやってくれていたのですが、最近は私も自分で小中学校、高校も含めてかなりチェックしています。最初の頃は批判的にばっかり見ていたのですよ、教科書を。こんな教科書だからみんな古典がだめなんだと思いながら見ていたので。けれども見れば見るほど、実は教科書ってすごくよくできているなと思うようになりました。どの教科書を選ぶかによって、少しずつ変わってくるとは思いますが。高校は教科書の種類が多すぎるので、わかりやすく中学を例に取りますが、中学校はやっぱり光村が大手でありますよね。次が東京書籍で、光村に追いつき追い越せみたいに思っているわけです。光村はやっぱり、自分たちが将来の日本人を背負っているという誇りをもって作っているのが感じられます。下手なことはできない。でも、自分たちの提案がものすごく大きな影響力を持っているってわかって作っていると思います。これはやっぱりプロが作っているという手応えを感じます。そして東京書籍は、光村より豪華にして楽しそうに見せようとしているわけです。だから今どんどん光村に近づいてきていますよね。確かに、絵が多いし写真も多いし、一見口当たりがよさそうに作ってあるので、これから東京書籍がますます増えるのではないでしょうかね。まずそういう現実があります。義務教育の教科書ってわりとちゃんとできているなという気はしますね。それに比べると高校用は、全然努力が感じられない。なぜかというと、この後大幅に変わるからです。二〇二二年度から国語綜合・古典ＡＢという区分も含め、教科書がガラリと変わってしまいます。変わっちゃうから、今努力しても仕方がないという風に、たぶん思っているんですよきっと。だから変わったときにどうなるか、というところをみなければいけない時期が来ています。

　昔は私もこういう風なものを入れて、みたいなことを色々思っていたことはありましたが、現時点では、ちゃんとした教科書を作ってくれているという気がしていますから、今度新しく出るものも、文科省に気に入ってもらえるかどうかってところで戦々恐々しながら、各社がかなり努力していい教科書を作ってくれると信じています。だから、それを使ってどういう風に教えるかの方が大事だと思います。

鈴木　私は教科書の細かな分析のようなことはそれほどしていないというのが正直なところです。ただ、一つ言えることは、例えば今日の資料の中にも挙げましたが、中学校二年生の教科書では、「那須与一」が出ているのと、「敦盛最期」が出ているのとに分かれるわけです。けれども、恐らく、どっちの素材であったとしても対応できると言いますか、ほぼ同じ問題をそれぞれの話から引き出してくることができますから、どちらでも悪くは無いと私は思っています。つまり、それを使ってどんな風に問題を発信していけるのかという、その議論をもっと深めた方がいいのではないかと思うのです。どの話がいいかというそういう問題ではなくて、今あるものから、どのように多様な問題を引き出せるのか、その議論をもっともっとやっていく方がいいんじゃないかと思うんですね。それと

併せて、私はよくわからないのですが、現場の皆さんは、例えば、この教科書だとこういうところがやりにくい、こっちの話の方がいいんじゃないか、という声があると思いますが、そういうものを集約して、どこかに公表して共有するというようなシステムは、今あるのでしょうか。現場の声が、その場だけで止まっているとしたら、それこそもったいない。こういう教材があるよって気付いていないことが、採用する側にも多いと思うので、この話だったらこんな授業ができるという、そのことをもっともっと発信できないのかなって思ったりもします。

三宅　あっ、今のお話を聞いていて、大切なことを一つ言い忘れた事に気付きました。指導書は、教科書を作った人たちが作るべきだと思います。指導書頼りなのです皆さん。私も昔、指導書を見ていた。まあ言い訳をすれば、それを見てただけではなくて、もちろん図書館に行って自分で調べたりもしましたが。指導書の内容はかなりひどいです。でも指導書見るでしょ、みなさん。結構。だから、指導書は作った人達の責任で作るべきだと思いますね。作った以上、指導法などにも目を配り、責任を持って授業提案なども行う。

教科書を作った人達、あるいは教科書会社が中心となって、ハブの機能をはたして、今鈴木さんのおっしゃった先生方との情報交換の場を作っていけると良いのではないでしょうかね。

青山　三宅先生も最初は指導書から入ったということ、暴露されましたので。この中にも教科書のお仕事をされている方がいらっしゃると思います。あと指導書も関わられたという方もいらっしゃると思います。いかがですか。

縦書きの文化

西亀　時間があるうちに聞いてみたいなと思いましたので、テーマがかわってもよろしいですか。

一柳研卒業で、今は聖ドミニコ学園という都内の私立女子高で国語を教えています、西亀咲江と申します。今日の話も、また仕事に生かしていこうと、興味深く拝聴しました。今日お三方にお伺いしたいのが、国語と縦書きについてです。二年ほど前から短歌の結社に入って、短歌づくりを始めて、旧仮名文語で読むとすごく面白くて、文法もこのためにあったのだと、やっと三十を過ぎてから色々楽しみがわかって、完了の「つ・ぬ・たり・り」も、気分によって使い分けられるとこんなに楽しいんだということを感じて、文法楽しいなと、やっと思えてきました。そして短歌にはまると、やっぱり縦書きの一行で、分かち書きとかせずに書くのが王道だと思えるのです。このように縦書きへの愛着はすごくあるのですが、それをうまく自分で言語化できず……。

今の職場では、一人一台アイパッドを生徒に持たせて、どんどんICT化が進んでいます。アイパッドはとても便利ですが、縦書きのことを完璧に忘れ去っている仕様で、今日のパワーポイントとかも、基本は横書き用に作られていますよね。たぶん縦書きをやっているのは国語だけだろうなという中で、縦書きを今後続けていく意義が私はあると信じているのですが。それがうまく言語化できなくて。古典や書道をご専門の先生方は、縦書き、横書きの問題をどういう風に感じてらっしゃるのかを聞いてみたいと思いました。

青山　まずは三宅先生にお願いします。今日以降あんまり聞けなくなっちゃうから。

三宅　そう言われると淋しいですが、私は横書きが全然上手に書けないです。縦もまあそ

んなに上手じゃないですが。やっぱり文字が縦書きで書くようになっているので、特に続け字みたいなものは。だから続け字を書こうと思ったら、縦書きしか書けないですよ。

青山　三宅先生のお好きな百人一首かるたとかね。歌なんかは縦に書かれてこそ美しいなと。歌に詠まれるもみじが美しいだけでなく、書かれた文字の美しさも愛でる文化があるんですよね。

三宅　そういうことですね。あ、青山先生ご専門なのだから、ついでに今、あなたも話したら…。

（一同　笑い）

青山　はい。全然予想もしないところでしたが。言葉を流れで「読む」ことと縦書きがどれぐらい関係するか、むずかしいところではありますが、書かれている文字そのものは、三宅先生がおっしゃったように縦書き用にできている。一字を書くときには、左上の部分から右下の部分へ書き進める動作性が多いわけですよね。縦書きだと、漢字にしても、ひらがなにしても、一字の右下で終わって、次の字の左上に動かしやすいわけです。やっぱり、動作性というところを考えても、縦書きの方が有利だと思います。一方で、読むことについては、横書きの方が一回に目を動かすときに読める量が多いのは事実です。ですが、文脈を縦書きで辿ってきた私たち日本文化の中では、慣習という視点からも、読むことに影響があるのではないかと思っています。ただ、ここには何の資料もないので、はっきりしたことは申し上げられません。日本語の場合、書く方は、断然、縦の方が楽ですね。効果的だと思います。

古典文学と文字の書き方に関して、他に何かお話がある方いらっしゃいますでしょうか。

鈴木　大学で授業をするときに一つの課題に、くずし字があります。くずし字を読むには、普通の活字を読むのと結局同じことだとは思うのですが、書き順がわからないといけないのと、もう一つ大事なのが、どんな風に字がくずれていくのかという、くずれる方向をイメージする事だと思うのですね。これを体験すると、右から左に流れていく文化が日本の文化の中にずっとあったのだという事がほんとうによくわかる。絵巻も右から左に流れていく。絵が展開するのも、日本人に右利きが多いのも。さまざまなものが右から左に流れているのは、縦書きという文化が、いろんなところに蔓延しているからなのだ、というところまで理解してくずし字の形を見ると、ああこういうことなのか、というのが非常によくわかると思います。私の実感としてはそんな気がします。

三宅　そのうち左からの絵巻とかできちゃったりしてね。

（一同笑い）

青山　あれ、なんかおかしくなってませんか、ちょっと。テーマはこれからの古典教育ですね。（一同笑い）

まあでもたしかにそういった物語がどういうふうに展開するかっていうのと絵巻は関係がある。

鈴木　電車も左から右に来ますよね。

青山　すごくわかります。そうじゃないホームにいるとすごく違和感がある。

鈴木　そうそう、本来はこっちから。

三宅　全然わかんない。

（一同笑い）

青山　はい、だんだん話がかなり広がってきたところですが、全員参加型がまだ達成できていないんですよね。で、あと時間が十分だというカンペが出ておりまして、ここで一、二分間、全員参加型で隣の方と感想を言い合

うお時間をとらせていただきます。その後、だんだんとまとめに入っていきたいと思います。ではよろしくお願いします。

（隣と感想を言い合う）

青山　はい、ありがとうございました。感想を伝え合うことで、それぞれの皆様がシンポジウムに参加した意義に繋げてくだされればいいなと思うんですけれど。

「これから」ということの一つに、学校現場での授業もさることながら、その子たちが高校生ならば大学受験もあるわけで、古典はどうしても関わってくる。ということで、福嶋先生からご質問があるということですが。

現代を生きるための古典教育

福嶋　実践女子大学文学部国文学科の福嶋健伸と申します。古典は、受験、大学入試の問題のために勉強するということがどうしてもあると思うんですね。これからの古典教育を考えた場合、大学入試のあり方を変えればかなり変わっていくんじゃないかと。センター試験は少子化といえ何十万人か受けてるわけですから、大チャンスといえば大チャンスですよね、古典を相当な人数が勉強しているわけですから。これからということを考えると、大学入試はどんな風に変えていくのがよいのか、高校の先生の授業のしやすさということも含めて、何か方向性があれば教えていただきたいなと思います。

三宅　私はもうあまり関わらない人になっちゃうはずなので。でね、横浜国大にいると、センター入試を受けて前期入試を受けてなんて感じで古典も関わってきますが、多くの人にとっては入試で古典っていらないでしょ、本当は。だからそういうふうに高校の先生が思えばいいのに、と思っています。本当に必要な人たちは自分でやるので、どうせ。予備校に行ったりしたら、もっと論理的にがっちりと受験テクニックを教えてくれるじゃないですか、と本心は思っています。だから古典は別に受験でやらなくていいです。これから日本を背負って外国の人たちと渡り合わなきゃいけないような、超エリートみたいな人たちは古典もやらなきゃいけない。でもその人たちはどうせ優秀だし、頭いいから自分でできる。と本当は思っています。

鈴木　本当のところだけ語って終わりましたね（笑）。私が一番恐れているのは、高校生や中学生のころにで「古典っておもしろいかも」とちょっとでも思った人が、その後の授業の体験の中で、「こういうことなら続けたくない」となってしまうことです。せめてその面白さを、学校を越えてでも共有できるような場を作ってすくい上げていく、そういうことができないのかなと思っています。古文を勉強すると、こういうところに繋がっていくんだよという、モデルケースみたいなものを色々具体的に出していくことが必要ではないでしょうか。本当に俗なことで言うならば、各学校代表の古文ができる子を集めて、そこでみんなで議論する。研究者を唸らせるような古文好きの高校生が全国から集まってくる、古文甲子園的なものをやるとかですね。古典に近づくとこんな風にいきいきとできるんだ、という生きる道を示すことがやっぱり大事だなと思っています。研究をしている者の一人として私が思うのは、古典を研究者である自分たちだけの物にしてしまってはいけないということです。古典の研究が色々なことに応用できるという、そういう道をなるべく示したいと常に思っています。私の場合、今回の話も、普段の研究の話とはちょっと違って、「教材」という枠が作れたことで色々な発想ができたという部分もあります。それによって、これまでは思ってもいな

かったようなところに踏み出せたかもしれない。色々と道を示してみて、それを共有していくことが大事だなと思います。

三宅　古文甲子園なんて、今までにすでにあっても良いのにね。

情報交換と発信の場所としては、古典教育デザイン研究会もあるのです。会誌は図書館リポジトリに載っちゃうとすぐ引用されますしね。だから皆さんが来てくださって、発信の場がないなと思っている方は、とりあえず大会で発表していただくというのも一つの手ですよね。小さなところから始めていくという点では準備はしています。

青山　必然的にまとまってまいりました。終盤となったところでコミュニティ的な発想ですね。先ほど先生たちが同僚とどう関わるかという話題も出ていましたが、子どもたち同士も関わって古典を自分たちのものにしていくという話、すごくいいなと思ってお聞きしました。

時間的にあと一件くらいになると思います。先ほど皆さんに話していただいた感想は、このあと親睦会もございますので、その場で深めていただくことにして、あと一件とさせていただきます。では、今、手が挙がったのでお願いします。

渡辺　弘前大学の渡辺と申します。教え子ではないのですけど、こういうファンもいるということで、手を挙げさせていただきました。この会場で三宅先生や鈴木先生、そして皆様のお話をうかがって、ここはすごい空間だと思いました。先ほど三宅先生は「危機的状況の古典教育」と言われていましたが、この会場が日本の古典教育全体であれば、未来は明るく感じます。今日は、問題点も挙がったけれども、同時に解決策もたくさんあることが示されました。教え子の皆さんのご質問は、まさに今現場で直面している問題だと感じました。そこで先ほどから、今この会場にはあるけれども、外、つまり実際の現場にないものは何だろうと思って考えていました。一つ気付いたのは、この中にいる方たちは皆国語が大好き、古典が大好きで、どのように古典の楽しさを伝えようかと考えている方ばかりです。しかし現場では、さきほどは、三行読みの先生、敵となる同僚の話題がありましたが、その同僚の先生は、教えていても楽しくないと思うのです。楽なんだけど楽しくない、この楽しくないと思っている先生方に何とか楽しいと思ってもらう必要があると思います。その点、ご意見、アドバイスあれば教えていただきたいと思います。

三宅　やっぱりアメとムチしかないのでは。

（一同笑い）

鈴木　話しにくいパターンばかりですね（笑）。私はとにかく自分が楽しんでいる姿を見てもらうことだと思っていますね。三行でも楽しいということが示せるかもしれません。いろいろな楽しみ方がある、私は楽しんでいるよ、というのを見せるようなネットワークを広げていくということかなと思います。

青山　話が尽きませんね。「これから」ということなんですけど、その前提として、「今を見つめる」という話が多かったように思います。三宅先生もおっしゃっていた今回の学習指導要領でも、中教審の国語ワーキンググループ等で揉んで、どうしたら子どもたちのためになる国語教育、あるいは古典教育になるかというのは、考えられていると思うんですね。私もよく書写で話をするときに、伝統文化に関する学習を重視していく方向が示されていることを伝えています。そのことについて、国語ワーキングの報告には「古典に親しんだり楽しんだり古典の表現を味わったりする

観点、古典についての理解を深める観点」から見直すことが出ていて、それはこれまでと同じだと思うのですが、「古典を自分の生活や生き方に生かす観点」というのも新たに書かれています。今、子どもたちが古典を学ぶ意味というものを、自分に「生かす」という観点から、もう一度問い直していく必要があるでしょう。

皆さんへ

先生方が古典と面白そうに関わっている姿、それを子供たちに伝えようとしている姿というのが大事なのではないかと思うんですね。三宅先生、鈴木先生にそういった視点から、皆さんにエールを送っていただきたいと思うんですけれど、いかがでしょうか。鈴木先生からいきましょうか。

鈴木　古典と現在との結びつきについては、先ほど駆け足で通り過ぎた、配布資料の最後のところに少し書いておきました。古典を今学ぶことについてですね。もし関心があればご覧いただければと思います。とにかくいろいろ方法は編み出せる。本文を読んで、そこから、今日の私の話でいう「問い」を発信し続ければ、色々できるんじゃないかなと思います。

三宅　これは私の本気、というところだけでいうなら、「自分自身を貫いてほしい」ということでしょうね。全部自分自身を貫いているときつ過ぎるので、昔だったらそう言ってたかもしれないですけど、今は本当に大事なところ以外はどうでもいいけど、本当にここは、というところは貫いてほしい。流されないでほしい。そしたらきっと少しずつよくなっていくと思います。

これからの古典教育をどうぞよろしくお願いします。

青山　「これからの古典教育をどうぞよろしく」、すごく粋な言葉ですね。三宅先生は、「はじめての古典文学」ということでお話されましたが、初めてお話を聴かれた方には「はじめての楽しい古典文学」に聴こえたと思います。古典の楽しさがわかるようなお話をしてくださいました。その「楽しさ」を広めていくのは、教え子である皆さんだと思います。ぜひ三宅先生の最後の素敵な言葉を胸に置いて、これからも活躍していただきたいと思います。

では、お二方にもう一度大きな拍手をお送りください。ありがとうございました。